

# アメリカどっち

嶋津 治夫

父の古びた写真がある。戦後間もなくの頃の写真だ。丈の長いコック帽をかぶってまっすぐに気をつけをしたように立っている五十年配の父の姿だ。それはまじめだが気むずかしい顔をしている。東京郊外の、進駐軍のキャンプの近くの野原で写したらしく、そばにはひよろひよろした松の木がみすばらしく生えている。

昭和二十四年、僕が生まれた時には父はもう五十三歳だった。だから、僕が知っている父は白髪頭の老人だった。その父は、戦前は早稲田鶴巻町というところで学生相手の食堂をやっていた。しかし戦後はそれを失って、一時期は進駐軍のベーカーリーとして勤めたりしていたが、僕の生まれた頃は、早稲田大学の西門の近くで、シユークリームの皮だとかポテトチップスを作る下請け仕事をして暮らしていた。

もとをただせば、父は一種の海の男だった。父は二十歳から三十歳にかけての十年余り、外国航路の大型客船のベーカーリーとして勤めていた。関西の田舎から出てきてどう

いう手づるでそうなったかは知らない。僕は母親べったりで、父親になつかない子供だったし、父との親子の会話もあまりないまま終ってしまったので、父の若い頃の話は何も知らないのだ。ただ、何かのおりに父の口から出てきた、ロンドン、マルセーユ、メルボルン、サンフランシスコ、といった外国の町の発音が、ヘンにバタ臭かったのを覚えている。そして子供の頃の僕は、それはずいぶん遠い国のことだと思っていた。

JR高田馬場駅から早稲田大学の方に歩いて行って、途中で面影橋の方へと曲がって行くと、戸塚第一小学校の少し先の左側に天祖神社てんそじんじやという小さな神社が建っている。その神社の裏手にあった借家に、僕は小学校にあがる前の一年くらいを住んでいた。僕は五歳で、昭和二十九年の頃だった。

父はその頃もポテトチップスなどを作る仕事をしていたのだらうか。その家で、僕は幼稚園にも行かず、いつもひとりりで遊んでいた。それでも夏休みには、近所の子供会のやっている朝のラジオ体操に出たりした。それは天祖神社の社殿の前で行われたが、毎朝僕はボール紙でできた出席カードにハンコを押してもらった。

僕はいつも何をしていたのだらう。ひとりりで遊ぶことが多かったが、ひとりでない時もあった。そうだ。今では名

前などは思い出せないが、少し大きい男の子と、同い年くらいの女の子と三人で遊んだ記憶が残っている。

その二人は兄妹だったろうか。ともに顔立ちが美しく、混血児のようだった。

やはり夏の日のことだった。男の子は小学校の二年生か三年生だったが、僕にはずいぶん兄貴っぽく見えた。女の子は小さくて大人しかった。ある日、世に言うところのお医者さんごっこみたいなことをした。僕は女の子がおしっこをするところをじつと見ていた。地面の砂がはじけて水たまりみたいになって、そこから小さな川がちよろちよろと流れるのを見ていた。

天祖神社の社殿の下には、たくさんの蟻地獄が巣を作っていた。その小さなすり鉢状の巣の中へ、僕らはアリをかまえてきては落して遊んだ。巣の底から砂の粒がぼつぼつとはねあがり、牙をふり乱したおそろしい形相の虫が現われて、砂の壁を必死で逃げようとするアリを巣の底に引きずりこむのをいつまでも見ていた。

そんな神社のかわいた砂の中に、へんな黒っぽい虫のようなものが隠れているのを僕は見つけた。太めの万年筆のような、片方がとがっていて、ほとんど動かなかった。「これ、何だろう」と僕は言った。その正体はスズメガという大型の蛾の蛹なのであったが、その時そこにいた混血児のような男の子は、何か重大な発見でもしたような口調

で、「これはアメリカカド、ち、ちだ」と言った。

彼はその虫をつまむと、「アメリカカドオーっち」と言つて虫のおなかのあたりをぎゅっと押した。すると虫はとがったお尻の方を苦しそうに動かして、しばらくもぞもぞやっていたが、やがてお尻でどこかを指し示すように体を曲げた格好で静止した。「アメリカはあっちだ」と小学校二年か三年の男の子は言つて、遠くの方を見るのだった。はるばるとした顔つきだった。

僕も、なるほどそうか、と思つた。そしてそれは、本当に遠いところなのだと、天祖神社の樹林の上に広がる空を見あげて思うのだった。

## 全作家朋友24人の短編小説集

### 全作家短編小説集 第十二巻

●会員には一冊一、〇〇〇円にて頒布中

上製本 A5判 二〇六頁